

---

# 嫌いな主

小田桐

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

嫌いな主

### 【コード】

N5583E

### 【作者名】

小田桐

### 【あらすじ】

芦屋理央は高校を卒業して一流と呼ばれる企業に潜り込んだ。だが、理央の仕事は中学生の女の子のお世話をすることだった。

## プロローグ

「あの・・・起きてもらえますか？」

起こすことを躊躇っているとしたか思えないぐらいに控えめな音量で遠慮がちな声をかけられた。そして自分が寝ていたと初めて気づく、よほど疲れていたのかもしれない。

眠っている俺を確認していたのだろうか？まぶたを開くと目の前に俺の大嫌いな女が顔をのぞき込んでいた。

「ごめん。なんか疲れていたみたい」

大嫌いと言っても、それは昔の話。今は昔ほど嫌いじゃない、多分。

「大丈夫ですか？今日はやめますか？」

ここでやめるって言えば、彼女がっかりするだろうなって考える。今日を楽しみにしていたことを俺は知っているから。

「別に具合が悪いわけじゃないから大丈夫だよ」

なるべく優しい声で答える。彼女に顔に笑顔が広がって、俺は少しうれしくなる。いつからだろう、彼女の笑顔が好きになったのは？

「着替えて準備してくるから待っててもらっていいかな？」

俺は自分の部屋に戻って着替えをした。どうしてこうなったのかをずっと考えていても答えは出ない、彼女と出会わなければ自分はずっと自由に生きていたのかもしれない。

でも、そんなことを今更考えても仕方がない。帰ったら久々に弟にでも電話をしようと思った。

主嫌いな

4年前、高校を卒業した俺は一流企業と呼ばれるところに滑り込むように就職した。運が良かったと思う、その会社に就職できたことは。

「娘の世話役と頼みたい」

社長室に呼ばれた俺はどんな辞令をもらうのだろうか、心待ちにしていた。一生、この会社でお世話になるつもりはなかったが、せっかく働くのだから有意義な仕事をしたい。

「といたしますと？」

「君は2・3年で仕事を辞めると言っていたね」

「はい、学費を貯めたら大学生をやりたいと思ってます。2浪、3浪なら珍しくもないのでそれぐらいならまだ学校に馴染めると思いまして」

「それなら、今のうちにたくさんお金を貯めないといけないね。わかるかい？」

「ええ、わかります」

「会社のほうではなく、住み込みで私自身が君を雇おうと思う。もちろん、休日も与えるし、給料だって悪くない。君だって、期限や目的があるんだからがんばれると思うのだが」

決めるのは内容や待遇を聞いてからでも遅くはない。

「君にやってもらいたいのは娘が家にいる間は一緒に居てもらうことかな。外に出かけるときは一緒について行ってやってほしい。友達になってもらいたいってところかな」

「私は友達を作るのが苦手ですよ。奇跡的に相性がよくないときと友達にはなれません」

「なら、大丈夫だ。奇跡的かどうかはわからないが君たちは相性がいいと思う。友達になれるほどに」

そして、おれは夕月に仕えることになった。

## ファーストコンタクト

「今日から私をご主人さまとお呼びなさい」

戸惑う俺を見下ろして夕月は言った。この娘はなにを考えているのだろうか。

「あなたは私に買われたのよ。ひざまずくのが礼儀じゃないの？」

「ご主人さまがそれを望むなら」

俺はひざまずいた、下を向いているから夕月には気づかれてはいないだろ。この時の俺が泣いていたことに。

「忠誠の証として足を舐めなさい」

俺は言われるがままに夕月の足に口づけをした。心が壊れた……。

「そんなこと言ってません。嘘はやめてください……」

こんな出会いなら夕月を嫌いになってはいなかっただろ、軽蔑をすることはあっても。でも現実の夕月は違っていた。

想像していたよりも小さくて可愛らしい女の子だった。ストレートの髪を後ろで縛っている姿は女らしいってよりも、幼さを強調しているように見える。

「初めまして、水鏡夕月です」

俺が仕えることになった主は中学生の女の子。考えてみたら自分の弟よりも年下の子供に仕えることになるのか。

「こちらこそ、よろしく願いますね」

これは仕事なので感情を出さずに一応は笑顔で返答することになっている。この家の人の説明によると夕月は13歳の中学2年生、俺にとって5つ年下のこの娘に色々と指示をされたり、こき使われた

りするのかと思うと少々気が重くなる。まあ、仕事だと思って割り切るからいいけどな。

「えーと、なんて呼んだらいいのかな？」

オドオドしたように困っている。そういえば、挨拶したときも目を合わせてなかったかな。これも事前に説明を受けていたが極度の人見知りで引つ込み思案だと言う。自分の意見を言うことができる立場にいるのに言わないようなウジウジしたタイプは俺は嫌いだ。

「お嬢様？ご主人様？夕月さん？」

そういえば家政婦のおばさんは夕月のことをお嬢様と言ってたかな。運転手のおじさんは夕月さんって言っていたような気がした。

「えーと、呼び捨てでかまわないです」

ん、別に仕事として接しないなら多分呼び捨てで呼んでいるだろうな。もしくはちゃん付けで。だけど、そういう訳にいかないよな、少なくとも屋敷の中では。

「君が望むならそれでも良いんだけど、さすがに人前ではそういうわけにいかないから、夕月さんでいいかな？」

「ええ、それでいいです」

依然として夕月は俺と目を合わせようとしない。誰に対してもそうらしいから、特別俺が嫌われている訳でもないだろう。

「それと、私を呼ぶときは呼び捨てでもかまいませんので」

そして俺は付け加えた。別に自分の呼び名なんてどうでもいいし。「っえ、でも・・・」

「夕月さんの友達になりたいと思っていますので。友達を呼ぶときは呼び捨てとかあだ名で呼んでいるでしょ？できたらそういう関係になりたいと思ってます」

相手をリラックサさせるために思ってもないことを口にしていった。もし、本当の友達に俺は中学生の女の子のお世話をする事になったと伝えたらどういう反応をするだろうと考え苦笑する。きっと、からかわれるか同情されるかのどっちかだろうから。

「よろしくお願いしますね」

最大級の笑顔で俺は言った。最初のこの話を聞いたときに夕月がもう少し大人なら、甘い展開を期待していたが目の前にいる小さくて胸もない幼児体型の童顔な女の子にそれを期待するのも無理だと思った。なら、せめて社長が最初に言っていたように友達になろうと心に決めた。もし、奇跡的に俺たちの相性が良いのなら。

与えられた部屋が思ったよりも豪華だった。洗濯機や台所用品は必要としないために与えられた部屋を丸ごと自分の部屋として使うことができる。待遇は悪くないらしい。

「欲しい物が合ったら何でも言ってくれていいよ。使わなくなった物でよかったですら君にあげるから」

そう言ってくれたのは夕月の兄の京司だった。京司さんは俺よりの年上の大学生、俺が行きたいと憧れている大学に通っている。そういう家庭環境に普通なら嫉妬などの負の感情を持つべきところが、人の良さそうな彼にそう言う感情をもてなかった。

「そんな、悪いですよ。気持ちだけで十分です、ありがとうございますね」

俺の主のお兄さんは妹の友達として歓迎してくれてるのだろうか？居候になる俺の部屋の片付けと一緒に手伝ってくれていた。

「ユヅとはもう逢ったの？」

「ええ、でも思いつきり警戒されていました」

「そうだろ。おふくろが死んでからはあいつは俺か親父にしか心を開いていないからな」

「それならどうして私が？」

ずっと疑問に覚えていた。どうして、普通の仕事をせずに待遇の良い住み込みの世話役をすることになったのだろうか。

「親父が言っただろ？君とユヅは友達になれるからだって」

「でも、わからないじゃないですか」

「まあ、それとね。君みたく目的と期限がある人なら最後までやり通せると思っただろ。良い意味でも悪い意味でも君はユヅと外をつな

ぐきっかけになれるはずだから」  
手を動かしながらも口も動かす京司さん。テキパキと作業をこなす姿はさすがに一流企業の御曹司って感じがする。  
「期待に添えるかどうかわからないですが頑張ってみますね」  
「そうだね、少ししか期待しないことにするよ」  
彼は笑いながら答えた。妹は苦手なタイプだったが、その兄とは仲良くやっていけるかもしれないと思うと少しは気が楽になった。  
その日は部屋を片付けたり、屋敷の説明を受けてるだけで一日が終わった。

「あの〜。朝ですよ。起きてください」  
ダブルベッドの広さとフカフカな布団、低反発の寝心地の良い枕が俺の眠りの世界から手放さない。

「まだ早いって」  
無意識のうちに布団を握りしめ頭まで隠れる。無理矢理布団を引っ張ろうとしているんだろう、布団を引かれてる感覚はあるが腕力で俺に適わないらしい。

「おねがいますよ」  
何だか泣きそうな声だった。ふと自分のおかれた状況を思い出し掴んでいた布団を離れた。

「キャン!!!」  
なんだか子犬が驚いたような悲鳴をあげて夕月が俺の布団を握ったままひっくり返った。初日から寝坊をしてしまったと思いつつすました顔で「おはようございます」と挨拶する。

「理央さん、おはようございます」  
立ち上がった夕月は一応は俺の方を向いているが目は見てくれない。  
「理央でいいですよ。もしかして、みんなもう起きてます?」

「父と兄はもう出かけてます」

そう言われて枕元に置いてある携帯を手を持った。ディスプレイには「8:00」と表示されている。夕月を改めて見るとすでに学校の制服に着替えていた。

「すぐに着替えますので居間で待っていてください」

俺は夕月を部屋から追い出して、速攻に着替えた。会社勤めという訳ではないのでスーツにネクタイではなく普通の私服にだ。

「えーと、学校に行くのに送っていった方がいいのかな？」

すでに学校に行く準備ができて夕月に声をかける。

「いえ、別に行けますから」

「そか……」

「朝食はテーブルの上に用意してあるのでどうぞ。もう少ししたら篠塚さんが来ますのでそれまでテレビでも見て休んでいてください」  
ん、これって俺たちの立場が逆な気がする。ちなみに篠塚さんというのは家政婦のおばちゃんの名前だ。

「ああ、ありがとう」

夕月はそれだけを言い残すと荷物を持って玄関に向かった。学校に行くのだろう、俺は玄関で靴を履いて夕月に声をかける。

「夕月さん」

「なに？」

初日から失態を見せた俺には懐いては居ないことは解るが、こちらが解るほどに不機嫌な声で返事をしてくれる。それでも俺はなるべく丁寧な声で次につづる言葉を口にした。

「いってらっしゃい、気をつけてね」

夕月は少し迷ったがこっちを向いて答えてくれる。

「いってきます」

夕月が出て行って一人になった居間で食事を取りながら弟も今頃学校に行ってるんだろうなと考えた。うちはここほど裕福ではなかった。ので親が大学に行かせることが出来るのは一人だった。不幸にも俺も弟も公立の大学に行けるほどの学力を持っていた、でも弟のほうは優秀だと俺は気づいていた。だから、俺は高校を卒業して就

職を決めた。

でも、学生になることを諦めきれなかったから学費を自分で稼いで大学に行こうと決めている。大学に行つてなにを学ぶかは決めていないが、まだ遊んでいた年頃。今から2年間働いて、2年分を取り返すほど遊ぼうと決めている。そのために水鏡家のいや、夕月に仕えることにしたのだから。

「お嬢様はお花が好きで優しい方なんですよ」

リビングに座り家政婦の篠塚さんと世間話をしていた。俺が知っていたことは夕月のことだ。

「奥様がいらつしやつた時はお嬢様は活発でしたけど、病気で亡くなられてからというモノ引きこもりがちになられ誰かとお話することも少なくなつたんですよ」

「そうだつたんですか」

「ええ、だからリオさんがお嬢様の心を開いていただけるとどんなに良いことか」

「努力してみます」

そう言う話を聞くと夕月に同情してしまふ。うちは両親とも健在だから夕月の気持ちはわからないが幼いときに親が死ぬつてことは辛いことだろうと検討はつく。

「さて、わたしはお夕食の支度をして帰りますね」

篠塚さんはそう言うつと台所に籠もつて料理を始めた。なにか手伝えることはありますか？と訪ねるが何もないと言われると困つてしまふ。夕月が帰つてくるのは15時ぐらい、まだ1時間ほど余裕がある。

篠塚さんが仕事を終えて帰ると入れ替わるように夕月が帰つてきた。

「おかえりなさいませ」

玄関まで行つて夕月を出迎える。さすがに三つ指をついたりはないが。

「ただいま」

夕月はそれだけ言うと部屋に閉じこもってしまった。出会ってまだ1日目なので何を離れたら良いか解らずに京司さんが帰ってくるまでお互いに自室に籠もったままだった。

こんな日が何日も続いた。俺と夕月は友達になるどころか余計にぎくしゃくしていった。彼女が俺に心を開かないのは解る、だけど、それと比例するように俺も彼女を苦手だと思い、そして嫌いになっていった。

中学生と友達になるのは無理があつたんだとずっと考えていた。

## ファーストコンタクト（後書き）

2人の出会いを書いてみました。これからどうなっていくか見守ってもらえたら幸いです

嫌いな主

## 2年目の夏祭り

「去年はここではぐれたんだったね」

俺はそう言っただけで夕月の手を握った。夕月は小動物が驚いたように一瞬ビクッと体が硬直したような様子を見せたが去年と違って握った手を握り替えしてきた。

「せっかくだから今年には花火を見ていきませんか？」

夕月が提案する。それを拒否する理由は俺にはなかった。

「去年はゆっくり見れなかったからね」

「うん、綺麗だったって聞いたわ。まるで恋する花火のように」

恋する花火とは夕月がこの前読んだ小説に出てくる花火。俺も読んだけどロマンチックなお話だったのを覚えている、夕月の年頃ではそういう話に憧れるのだろう。

「さて、いこうか」

浴衣姿の夕月をエスコートして花火がよく見える河原へと移動した。

「あう。。。忘れてる思ってたのに・・・」

忘れるはずないだろうだって、そんな君を見たのは初めてだったんだから。そう、これは俺たちが出会って一年半の物語。

「今日は縁日がある日だね」

京司さんが言った。俺と夕月はテレビを見ていた、お笑い芸人がくだらないことをしている番組だが、見ているとなぜか笑える。

「兄さんは行くの？」

「いや、今日は行かないかな。明日、友達たちと見に行くことになつてる」

「そうなんだ」

「ユツは？」

訪ねられると相談するように夕月が俺を見る。夕月が行くとなると俺も一緒について行くことになるのだから。

「夕月さん、これから行きませんか？」

夕月は行きたいんだろうなと思い、俺から提案する。その言葉を待っていたように夕月は行きたいと即答してきた。

「私、着替えてきますね」

そう言つとダッシュで部屋の中に消えていく。京司さんは上着を羽織つて車の鍵を手を持った。

「行きは送つてやるけど、帰りは自分たちで帰って来いよ。それと明日は休みだけどあまり夜遊びさせるなよ」

そう言つと玄関の方に消えていった。リビングで一人残される形となった俺、京司さんは妹にとことん甘いらしい。

「おまたせ」

ハイビスカス模様の浴衣に着替えた夕月が居た。年頃の女の子の浴衣姿は色っぽいと思うし、そそられるけど背が小さく胸もない夕月が着ると可愛らしい女の子って言う感じだった。

「似合ってるね」

少し嬉しそうに照れてる顔の夕月。こうやってお互いが目を見て話すようになるのにどれだけ苦労したことかと懐かしい感情を思い出した。

夏祭りの出店の定番といえば金魚すくいだと思う。夕月は薄いモナカを構えて悪戦苦闘している。もし、金魚をすくったところで家で飼うことは出来ないだろうけど。

「そろそろ他の所に行きましょう」

5戦目を敗退した夕月に声をかける。ほつとくと取れるまでやっていそうな勢いだったから。

「まだ、やる」

「なら、あと一回ですからね」

悔しそうに頬を膨らませている夕月を急かして次の出店を回った。俺は美味しそうなタコ焼きを見つけると1パック購入。半分を夕月に取られたがそこそこ満足。

「リオくんってこうやって女の子と縁日でデートとかしたことがあるの？」

「こうやって女の子とデートか。夕月は自分が口にした意味をわかっているのかな、今の俺たちはデートしてるって自分で言ったことに。そうだね、女の子も含めた何人かで遊びに来たことならあるけどね」

「なら、縁日でデートは初めてなんだね？」

「どうやら、夕月にかかわられていたらしい。ちょっとだけ悔しくなる。」

「夕月さんはいつか俺の代わりに彼氏に連れてきてもらうだね」

「そうね、素敵な彼氏が出来るまでの練習だと思っことにするね」  
俺は練習相手かよ。まあ、それでも良いんだけどね、でも俺の場合には中学生じゃ練習相手にもならないかな。

「っあ、あのぬいぐるみ可愛い」

「そう言つと100円くじの出店に近づいていった。やっぱりまだガキだなあ。」

「1回だけだからね」

大きな景品っていうのは客寄せのためだけに飾ってあるモノ。だから、夕月は案の定はずれを引いて小さな景品を手に入っていた。

「リオくんは何かしないの？」

「ん〜、さっき食べたタコ焼きだけで十分かな。それにこういうのって見て楽しむモノだしね」

「楽しい？」

「うん、楽しいですよ」

去年に比べると格段にねって言おうと思ったがその言葉を飲み込んだ。せっかく夕月がはしゃいでいるんだから、つまらないことを

言う必要はないし。

金曜日の夜って言うこともあって人通りが激しかった。普通に歩くだけでも人混みで歩きにくい。

「ねえ、はぐれそうだから手をつないで行こうか？」

笑うように夕月が提案する。練習の続きでもするつもりなのかな？  
「手を握ることは仕事には入ってないから。お父さんから許可をもらったら握ってあげますね」

ポケットに手を入れたまま答える俺、予想外の答えにちよつと膨れた夕月の顔。時計を見るとそろそろ花火大会が始まる時間だった。

夕月の手は柔らかかった。まるで丁寧に扱わないと壊れてしまうかと思えるほどに、いや言い過ぎたかな。

「手を握るのは仕事に入っていないなかったんじゃないの？」  
握った手を離そうともせず夕月は言う。

「仕事じゃなくて、デートでしょ？」

そう言っただけはにっこりと微笑んでみせた。夕月の頬に赤みが差して目をそらされてしまう。悪戯なことを言ってるよりも照れてる方がよほど可愛らしい。

「花火が綺麗に見える所に行こうか？」

この縁日にも花火大会にも何度も来たことがあった。友人と来たこともあれば家族と来たこともある。幼い頃に家族で来たときに迷子になった弟と一緒に花火を見た場所に向かうことにした。

「そんなところあるの？」

「うん、あまり人が来ない所だよ。ただ、少し道が悪いけど良いかな？」

夕月は頷いた。それを肯定と受け取ってその場所に向かう。藪の中を通るために足場が少し悪かったので夕月が転ばないように気を遣いながら歩いた。

「真っ暗なところね。周りに誰もいなくなっちゃったわ」

「うん、穴場だからね。恋人が出来たらそこで花火を見ようと思っ  
ていたんだ、だから夕月さんに彼氏が出来てもこの場所に来ちゃダ  
メですよ」

「わかったわ。リオくんが女の子を連れ込んで暗がりですツチなこ  
とをしてる場面なんて見たくないから来ないであげるね」

「まったくここでそんな言葉を覚えたのだろうか。思わず苦笑して  
しまう。」

「あなたにはそんなことしないから安心して下さいね」

小さな声で残念って聞こえたのは空耳だろうか、いや空耳だろう、  
きつと。

「着いたよ」

月明かりで足下にある川の水が少し輝いているように見える。俺  
はその水をすくってみる、ひんやりして気持ちの良い温度だった。

「冷たいわ」

夕月も俺と同じように屈んで水の温度を確かめたようだ。その仕  
草や表情はあと5年もしたら思わず抱きしめたくなくなるような感じだ  
った。

「そろそろ花火があがるよ」

俺の言葉に合わせるようにタイミング良く花火が上がって天で散  
った。花火の種類は解らないが綺麗な模様だった。

「綺麗ね」

夕月がうつとりするようにつぶやいた。

「デートなんだからさん付けとかかきこまった呼び方はやめてもら  
ってもいいですか？」

夕月が言った。確かにデートだとしたらムードのない話し方だっ  
たかもしれない。

「そうだね、悪かった」

暗くて表情がよく見えないが花火の光で夕月がにっこりと笑った

のがわかった。

「花火が綺麗だね、ゆづき」

「そうだね、リオ」

オイ、だからと言っておまえまで俺を呼び捨てかよ。それって何か間違っていないか？

「君の方が綺麗だけだね」

10年後はね。と心の中で付け加えておく。

「ありがとう、嬉しい」

ちよつとサービスしすぎたかな？でも喜んでる夕月を見るのも悪くはない。ホントにね。

「ねえ、リオ。こういう時ってキスとかするものなのかな？」

上目遣いで俺を見ている、キスをねだっているのがわかった。

「そうだね、恋人同士ならキスをするところだね」

夕月は早く大人になりたいと考えているに違いない。初めて出会ったときは陰気な少女だった、無口で人見知りか激しい彼女は学校でも孤立した存在だったのだろう。今は明るくなったと言っても代わり映えしないクラスメイトの中で友達を作るのは難しい、それに夕月が通ってる学校の高等部に在籍している弟から夕月の話は少しだけ聞いている。

「私、今は恋人が居ないしリオも居ないみたいだから今だけなら恋人になつてあげても良いよ」

今だけか、それは夕月自信のための言葉だろうか？それとも俺に気を遣つて言っているのだろうか？判断できない。

「嬉しいこと言ってくれね」

「だから、キスしても良いよ。でも、キスまでだからね」

ちよつとだけ心が揺れた。だけど、それは夕月のためにならないことを俺は知っている。

「そうだね、ゆづきがあと2年したらキスさせてもらうね」

「今は？」

「今はダメ。ゆづきがあと少しだけ大人になつたら大人のデートし

嫌いな主

よつね  
「

残念なようなほっとしたような表情を夕月は見せる。これで良かったのだと自分に言い聞かせた。

涼しい夏の夜だった。

## 2年目の夏祭り（後書き）

このお話の時間軸は適当ですwって少しはかんがえているんですけどね。楽しい思い出と辛い思い出をシャッフルしてしていきたいと思えます

嫌いな主

## はじめての料理

刃は切れ味と大きさは比例しなかった。小さなナイフが俺の指を切る、中指に感じる痛みに思わず顔をしかめてしまう。

「いてっ」

思わず口から漏れる言葉、沈黙を破るのには十分だった。

「痛そうね」

夕月が怪しい笑みを見せた。苦痛にゆがむ俺を掴んだ夕月は華奢な体からは想像も出来ないほどの力だった。

そして夕月は美味しそうに俺の血をすする。俺の苦痛や痛みを味わうように……。

「やめて」

俺が言った。夕月がクスクス笑うように俺を離した。そして、俺を傷つけたナイフを握った。恐怖に震える俺を夕月が見下ろしていた。

「って、変な回想しないでくださいよ……」

現実に戻された。夕月に料理を教わりだしのは水鏡家に来て半年たった頃だった。

「理央、無理しない方が良さぞ」

「いや、覚えたいんです」

「兄さん、大丈夫よ。私がちゃんと教えてるから」

夕月から料理を習ってるところだった。水鏡家に夕月に仕えてると言っても家事的なことは今までやったことがなく、夕月のほうが得意だったのだ。

「今まで包丁とか握ったことあるの？」

「小さい頃学校でやったぐらいかな」

「自分でご飯を作ったことは？」

「カップラーメンやトーストを焼くぐらいかな」

「野菜の皮とか向ける？」

「えーと、皮むき器使えば」

「リンゴとか皮をむいたことないの？」

「母親や弟がやってくれたかな」

って感じの俺だった。料理を覚えようと思ったきっかけは朝食だった。夕食は家政婦の篠塚さんが用意してくれているが朝は夕月が早起きして人数分作っていた。俺は夕月が早起きしてご飯を作ってる間、布団の中で寝ていたのだが。

「包丁の握り方とかぶきつちよで怖いわ」

夕月が言った。俺も自分で怖いと思ってるよ。

「心配するな、薬の用意は出来てるから」

京司さんが居間から響く声で言う、京司さんと社長は居間でのんびりくつろいでいた。

「大丈夫ですよ」

俺も大きな声で言い返す。

「芦屋くん。料理を覚えるのは良いことだと思うが、怪我だけはないでくれよ」

「はい、わかってます」

絶対に意地でも料理を覚えてやろうと心に決めた。

「とりあえず、簡単な料理からおぼえましょう」

俺に料理を教えるのに悪戦苦闘してる夕月が言った。夕月に人參を渡されそれを細く切るように言われる。

「わたしが見本を見せるね」

見事だった。料理が出来る家庭的な女の子に憧れるというが、俺も例外ではなかったらしい。料理を作ってる夕月にほんの少しだけ憧れてしまった。

「リオくん、やってみて」

言われたように包丁を握って人参を切ってみた。夕月と違ってなんか危ない気がする。

「指を少し丸めるように。猫の手みたくな」

そう言われて想像したのが招き猫だった。刃の部分を左指の第二関節ぐらいに当てて人参を切る。

「にゃんにゃん」

「リオくん。鳴き真似はしなくていいから・・・」

危なつかしく料理をしている俺たちを心配になってか面白がってか京司さんが台所まで様子を見に来ていた。そんな京司さんに思いつきり笑われてしまった俺が居た。

「京司さんは料理できるんですか？」

「おまえよりはな」

そう言って京司さんはまな板の上に乗っていたタマネギを器用な手つきで細かく切った。夕月の方が上手だったが京司さんもそこそこ料理が出来るらしい。

「まあ、別に男は料理できなくてもかまわないんじゃない？料理が得意な可愛い彼女でも見つければ」

「その彼女がいらないから料理を覚えるんですよ」

「ユヅに友達でも紹介してもらおうんだな」

そう言つと京司さんは椅子に腰をかけた。どうやら居間に戻らず俺たちの料理を見学していくつもりらしい。それと中学生の友達を紹介してもらつても家に連れ込んで料理を作ってもらうわけにはいかないでしょ？しかも、ここは俺の家じゃないし。

「リオくん、次は兄さんみたくタマネギ切ってみてね」

えーと、京司さんは指を曲げて包丁を早く動かしてタマネギを切っていたな。俺も同じように指を曲げてゆっくりだが切ってみる。

「そうそう、その調子」

俺もやればできるじゃん。夕月が切るほど細かくはなっていない

が初めてにしてはそこそこ上手いと自分で思う。

調子に乗ったのがいけなかったのかもしれない。徐々にスピードを上げてタマネギを切っていたが途中で指に鈍痛を感じた。

「いてっ」

手元を見ると指先が血で滲んできていた。

「ほら、調子に乗るから」

タマネギの汁が指にしみて余計に痛かった。少し涙目になったのは痛みだけのせいではないだろう、きつと。

「そんなの舐めてたら治るわよ」

夕月は俺の指を見て、そしてペロリと舌をだし舐めた。痛みは治まった気がするが何かくすぐりたい、そしてニヤニヤと見ている京司さんの視線の方が痛かった。

「つきゃ」

何かに気づいた夕月は乱暴に俺の手を投げる。俺と夕月は言葉に詰まった。

その日、俺たちが作ったのは卵焼きだった。細かく切った野菜を具として溶かした卵に入れてフライパンで焼くだけの単純な料理。でも、当時の俺にとっては大変な一品だった。

そして、できあがった料理を酒のつまみとしてみんなで食べた。

当時、俺は未成年だったけど、京司さんに勧められビールを飲んだ。初めてという訳じゃなかったが久々のアルコールは美味しかったのを覚えてる。

料理を覚えたいと思ったのは夕月と一緒に朝食を作ろうと思ったから、正直、あの時はまだ夕月と話すことも少なく出来るだけ仲良くなるうと思っていた。それに仕事と接するのにそれらしいことを夕月にしてあげることも出来ていなかったし。でも、今思えば簡単なことだったんだと思う、でもその簡単なことが出来るまで半年ぐらいかかっていた。

嫌いな主

嫌いだっただ日々を取りもどそうと思い、出来るだけ夕月と仲良くなりたかったのだ。

## はじめての料理（後書き）

出だしの部分はお遊びですw  
毎回こつこついつくだらなことを書いていきたいです。

嫌いな主

## 嫌いな日々

静寂や沈黙は俺にとって心地良いはずだったのに夕月と同じ部屋に居るときの沈黙は苦痛だった。言葉を交わすこともなく同じ部屋でお互いに自分の机に向き合って勉強をしている。そして、それが俺たちの日常だった。夕月と出会った半年間は。

「いやな、思い出ですね……」

ああ、全くだ。

令嬢という者は無駄だと思えるほどの習い事をしているイメージがあった。茶道や華道に始まり、社交ダンス、そしてテニスなどのスポーツ。最後に身を守るための護身術。夕月は俺のイメージ通りにいろいろな習い事をしていた。

こんなことばかりやってると友達を作る暇がないだろうと思っ  
てしまう。だけど、京司さんに聞いたらこれらは全て夕月が自分の  
意志で習ってるらしい。

「芦屋くん、その本おもしろいですか？」

田中さんに本を借りて読むことが多かった。もともと自分自身読  
書する習慣がなかったが暇な時間をつぶすには読書が最適だった  
のだ。

「ええ、読み始めると止まらなくなりますね」

夕月が教室で学んでる間、運転手の田中さんとカフェでコーヒー  
を飲むのが習慣になっていた。田中さんは元々タクシーの運転手を  
していたみたいで、前任の水鏡家の専属ドライバーが田中さんを推  
薦してここに勤めることになったらしい。前任のドライバーさんは  
もともとはタクシー会社の先輩だったとこの前、話を聞いた。

「田中さんって結構読書家なんですね」

「もともと、そんなに本を読むほうじゃなかったんだけど、待ち時間が長いからね。いつのまにか読書が趣味みたいなモノになったんだよ」

確かにそうだろうと思う。夕月につきあっているだけでもこんなに待ち時間が多いんだ、これが社長につきあって職場や取引先を回るなら暇な時間がたくさんあるに違いない。

「さて、そろそろ夕月さんが戻ってくる時間ですね」

「ええ、車を暖めて待ってますので」

田中さんがそう言って車の方に戻った。夕月が戻ったら田中さんの携帯に電話して玄関までつけてもらう、これがいつものやり方だった。

基本的に車の中は沈黙だった。BGMとしてラジオが流れている、だけど会話はほとんどなかった。

「夕月さん、今日はどうでした？」

「いつもどおりです」

「お腹すいてませんか？」

「いえ、別に」

「疲れてませんか？」

「疲れてます」

こんな感じ。だから、必要以外は何も言わないようにしている。話せば話すほど疲れるからだ。

習い事をしてる教室が近くにあるときは別にかまわない。だけど、水泳を習ってるプールと護身術を習ってる道場は車で1時間かかる場所にあるのでその2つの時の移動は苦痛だった。

屋敷に戻ったら、食事の時間。田中さんは夕月を送り届けるとそのまま帰ってしまう。だけど、俺はそう言うわけにはいかなかった。俺の住んでる部屋は夕月の屋敷の中にあるのだから。

「いただきます」

「いただきます」

篠塚さんが作ってくれた料理を二人して食べる。もちろん、会話はほとんどない。夕月が早く帰れるときは家族がそろって食事をするが、帰りが遅いときは夕月を二人で食べることになる。正直、どんなに美味しいモノを食べても美味しくは感じない。

京司さんや社長がいると、夕月は二人と会話もするし、二人は俺にも話を振ってくれるから会話がなりたつ。この時は夕月と会話をして楽しい食事をしたいとは考えずに二人だけの食事の時間がなくなればいいとずっと考えていた。

食事が住んだら、風呂に入ったりテレビを見たりする。この時間はまだ他の二人がいるから心の平穏が保たれるが勉強をする時間は部屋に籠もることになる。夕月は学生の本分として勉強をする、そして俺は大学受験のために勉強をしている。部屋でふたりきりで。まあ、お互いに自分の世界に入ってるから苦痛ではないが、それでも居心地は悪い。いっそのこと自分の部屋に戻って勉強したいくらいだ。

たまにどちらかが勉強をやめてテレビを見たり本を読んだりすることがあるが、やっぱり会話があまりない。こんな日々が2年続くと思うと憂鬱だった。

嫌いな日々（後書き）

2人が仲が悪かった時のことを書いてみました。2人が仲が時期を  
書いてる方が楽しいです。

嫌いな主

## 妹思い

深刻そうな表情で京司さんが言った。

「おまえしかいないんだ」

ドキドキする、今までノーマルだと思っていたが自分の中の隠された一面が徐々に顔を出してきている、だけど俺は悪い気はしてなかった。

「でも、、どうして俺なんか……」

「理由が必要か？」

ダメだよ。それ以上進むと引き返せなくなってしまう。でも……

「理央、よろしく頼む。見捨てないで……」

引き返す必要なんてない。このまま流れるままに進もう、きっと俺はそれを望んでいるのだから……

「あの、、なんか違うと思うんですけど……」

仕方がない、現実を話そう。えーと、夕月を嫌いになって何日目の話だったかな？それほど時間がたってなかったときの物語を。

「今日は休みだろ。どっか行かない？」

「いいですよ、どこに連れて行ってってくれるんです？」

休みの日に京司さんが遊びに誘ってくれた。この屋敷で働いていると外部との接点があまりなく出会いがなかった。友達を作るのは難しい環境。

「服でも買いに行きたいんだ。つきあってもらってもいいか？」

「どうせ、予定が入ってないからいいですよ」

京司さんは気さくな人だった。お金持ちのボンボンっぽいところ

もあるが人間的には嫌いではなく一緒に遊んでいても楽しいと思える人、妹の夕月と違って。

「車出してくるから」

「これ、おまえに似合うじゃない？」

「少し派手すぎませんか？京司さんの方が似合ってますって」

自分の服を買いに行くときは格安の量販店に行くのだが京司さんが行くところは滅多に行かないようなブランド物を置いてある店だった。

「どつちかというところシックな物の方が好きなんですよ」

「もったいないな。せっかく良い面してるんだから」

「顔は関係ないですよ。自分に似合ってる服を選ぶのがオレ流のおしゃれなんです」

とまあ、言ってみるが実際は自分に似合ってるよりも収入に見合う服を選ぶのがオレ流って感じなんだな、これが。

京司さんは俺と違って派手な感じの服を好むし、アクセサリや香水をつけるのが好きなようだった。男のくせにチャラチャラしてるとは別に思わない、人それぞれだから。

「このネックレス、ユヅに似合いそうだな」

シルバーのアクセサリを京司さんは手に取っていた。小さな葉のデザインがとても可愛らしかった。

「そうですね」

同意する。でも、夕月にそういったアクセサリが似合うとは正直思えなかった。だけど、夕月に似合うアクセサリなんて想像もできない。

「これってペアになってるのか」

女性用が葉が2枚、それよりも大きめのチェーンについている男性用が葉が3枚あった。見ようによっては葉がハート型を作ってるようにも見えるデザインだった。

「買っていくかな」

そう言って京司さんがそのネックレスを買った。女性用だけをラッピングして、きつと夕月にプレゼントするつもりだろう。

「とつつきにくい娘だとは思うけど仲良くしてもらえないか？」

ちよつと洒落た焼き肉屋でご飯を食べながら京司さんが言った。

「でも、俺は嫌われるみたいですよ」

「別に嫌っては居ないと思うぞ。好かれているとも思わないけど」

そうなんだよね、俺だって夕月と出来たら仲良くしたいさ。

「正直、どんな風に接したら良いかわからないですよ」

「別に普通で良いと思うぞ」

それなら今だってやってる、普通に接していてお互いにぎくしゃくしてるんだから。

「ユヅは母親にべつたりだったんだ。だけど、病気で死んでいらいふさぎ込むようになってな」

うん、それは篠塚さんに話を聞いている。

「もともと、人見知りするところがあつてさ。でも、母親が死んでからというもの人見知りどころか他人と口すらきかなくなつてきてる」

「お母さんってどんな人だったんですか？」

「優しい人だったよ。そしていつもユヅをかわいがっていた。まあ、その分俺がほつとかれたけどね」

母親の愛情が大きかったからこそそれを失ったときのショックが激しいってことが。

「ユヅのことどう思う？」

答えに詰まった。陰気、無口、協調性がない。って言葉が思いつくがそれを口にするのは躊躇ってしまう。

「あいつってあんな性格だから学校でも友達がいらないらしい。いつも孤立してるって学校の先生が言ってた。だから、今のあいつにはおまえしかないんだ。」

「でも、どうして俺が？」

「人の縁に理由が必要か？でも、強いて言えばおまえらが似てることかな。別に顔や性格が似てるってわけじゃないがなんとなく通じるモノがおまえらにはあるんだよ」

「そうですか？」

「ああ、間違いない。理央、ユヅをよろしく頼む。見捨てないでやって欲しい」

「わかりました、友達になってみせます」

翌日、俺と夕月が仲良くなった訳じゃない。でも、お互いに努力をしていたと今振り返ればそう思える。夕月は夕月なりに俺に近づいて来ていたんだ。だけど、そのときの俺はそれが鬱陶しかった、夕月も夕月で俺のことを鬱陶しく思っていたに違いない。

でも、俺たちは仲良くなったのは間違いはない。夕月、ごめんね。時間がかかりすぎて。

## 春のドライブ

夕月が脅えていた。狭い密室に閉じこめられ夕月は逃げ道がない、夕月の運命は俺の手に握られている。

「わたし・・・怖いわ・・・」

ダメだよ、夕月。もう遅い、走り出したら止まらないんだから・・・。

「お願い、助けて・・・」

夕月になにを言われようと俺は止まるつもりはなかった。たとえ、どんなに傷つけることになったとしても。

「いや～～」

夕月の悲鳴が響き渡った。

「私、そんなに怖がっていませんから・・・」

時間に余裕ができたときに念願の免許を手に出ることが出来た。

さすがに車を買う余裕まではなかったが、とりあえずは免許を欲しかったのだ。

「どうして2人がいるんですか？」

「面白そうだから」

「心配だから」

免許を取り、運転を田中さんに教わろうとしてる時だった。社長から許可を得て車を借りることができた、助手席に田中さんが乗り俺が運転するはずだった。だけど、後部座席に京司さんと夕月がちゃっかり乗っていた。

「危ないから家に帰ってくださいよ」

「別に公道を走るのを初めてってわけじゃないだろ？すでに免許持

ってるんだから」

「でも、この車を運転するのは初めてです」

「いいから、俺たちのことは気にするなって」

必死に抗議するがどうやら下車するつもりはないらしい。仕方なくエンジンをいれることにした。

「芦屋くん、最初はゆっくりと走ってくださいね」

「はい、わかりました」

屋敷の周りを走ってからバックや車庫入れを練習する。何度も何度も切り返しをしないと上手く止まれなかったが数を重ねていくうちになれてくる。それに田中さんの教え方も上手だった。

「芦屋くんは素質があるみたいですね」

褒められると嬉しくなる。でも、遠出とかドライブを期待していたのだから、後ろの2人はつまらなそうだった。それでも30分ぐらいいはおとなしく車庫入れの練習を見ていてくれた。

「なあ、理央、車庫入れを見てるの飽きた。せっかくだからどっか遠く行かない？」

「自信がないからいやです」

「田中さんも付いてるし大丈夫だって」

「私はもう少ししたら出ないと行けないのでそれは無理かもしれないです」

「ということですよ」

その日の練習は何事もなく終わった。練習を終えた車を洗車して元のあった場所に戻して夕食を食べる。それで終わるはずだった・

・

「理央、ドライブ行くぞ」

突然の誘いだった。夕月と夕食の片付けをしているときに突然思いついたように京司さんが提案する。

「誰の運転ですか？」

いやな予感がしたので一応聞いてみる。

「もちろん、おまえに決まってるだろ」

「いやですって」

「ユヅも行くだろ？」

「うん」

俺の意見を聞くつもりはないらしい。俺はさすがのように社長を見る、目があつたから救いの言葉がかかることを期待した。

「あまり遅くなるなよ」

お子さんたちを危険にあわせたいのですか？

「リオくん、信号赤だつて」

わかつてるって、俺にだつて目はあるよ。

「歩行者が歩いてるよ、スピード落とさないよ」

大丈夫だから、この距離ならぶつかったりしないって。

「対向車が来てるわよ」

助手席に座つて夕月がうるさかった。そんなに怖いなら乗らなければ良いのにつて何度心の中で呟いたことやら。

「大丈夫ですよ、スピードも出してないしぶつかけたりもしませんよ」

「心配なんだろ？おまえが自信なさそうに運転してるから」

後部座席から京司さんの声が聞こえる。

「俺は別にぶつかるとは思つてはいないからな」

この一言で救われるね、夕月にあれほど言われてたら誰だつて自信なくすさ。

「で、どこに行けば良いんですか？」

「そうだな、コンビニで花火でも買って河原にでも行くか」

しばらく走つてるとコンビニが見えたのでそこに寄ることにした。そのコンビニは反対車線に合つたので右折するときに夕月の叫び声がうるさかったが。

「さすがにバックを練習しただけあつて一発で入れたな」

京司さんが褒めてくれる。田中さんの練習の成果が早くも現れた

ところだった。

「これぐらい余裕ですよ」

俺は地球に優しい男なので車から降りるときはエンジンを切った。コンビニで花火とジューズを買った。

「リオくんが来て一年がたつのね」

線香花火を手にして夕月が言った。小さな花火はすぐに玉が落ちてしまう、だけどその儂さが美しい。

「そうですね、最初はどうなることかと心配でした」

「ユヅと上手くやっていけなくてか？」

「それもありませんね」

苦笑して答えた。でも、ホントにそれが一番の問題だったんだけどね。

「今はもう大丈夫ですけどね。でも、夕月さんだって私のこと苦手だったでしょ？」

答えにくい質問をしたのかもしれない。夕月が考えてる。

「そんなことなかったよ。ずっと仲良くしたいと思っていたもん」

ホントにそう思ってくれていたなら嬉しいよ、でも俺の方は最初は君のことが苦手だったんだ、ごめんね。

「こうやって遊べるようになってホントに嬉しいですよ」

「ホントだよな、俺だっておまえたちが心配だったんだぜ。余計に夕月がこもりがちになっただら困るし、でも理央は良い奴だから追いつく訳にも行かなかったしな」

あなたは追い出そうと考えてたんですか……

「さて、帰るか」

余談だが帰りも助手席から夕月の悲鳴が鳴り響いていた。俺は絶対に夕月を車に乗せないと誓った。

## 嫌いな日々2

俺は相手が傷つく言葉を選ぶことが出来た、そしてそれを口にしていた。夕月もそうだった、俺と夕月はお互いに嫌な部分と同じだったのだ。いや違う、同じなのは嫌な部分だけじゃない、俺と夕月はもっと根本的な部分が同じだからお互いに疎ましく思い合っていた。

だから俺たちはあんな言い争いをしてしまった。

「私はあなたみたいな人が嫌いです」

「奇遇だね、俺も君みたいな人が嫌いだ」

でも、違っていた。夕月を嫌うほど自分自身を嫌っていく、ホントに嫌いなのは友人の中にある自分自身の姿だった。それを知っていても相手を嫌わずにはいらなかった。

「でも、それって……。自分を好きになれたら相手の事だって好きになれることですよ？絶対に、そうですよね……。」「

ああ、その通りだよ。君は俺の合わせ鏡なんだから。

俺たちが言い争った時に社長も京司さんも近くにいなかったことは幸いだった。もし、2人が俺たちの話を聞いていたらきつと傷ついていたに違いない。俺たち自身だって傷ついたのであるから。

「理央って私みたいな中学生にへこへこして恥ずかしくないんですか？」

どうしてこんな言い争いをしてるんだろう。

「別になんとも思いませんよ。夕月さんみたいな器の小さい人間になんと思われても」

「それなら、あなたのほうが小さいですよ。そんなにお金欲しい

の？なんのためにお金を貯めてるかはわからないけど、あなたが言う器の小さい人間のご機嫌をとらないと行けないなんて不憫ですね」  
ああ、ダメだ。言わなくてもいいことまで口から出てしまう。

「親が金持ちだと良いものです。社会に不適應でも生きていけるんですから、お金を稼ぐ必要だつてこれから先無いでしょうね」

「私と親は関係ないわ」

「関係あるから私は今、あなたのお世話をしてるんでしょう？」

「別に私が頼んだわけじゃないわ」

「そうですね、自分で誰かに何かを頼むことが出来る人なら私がここにいない必要はないでしょうからね」

「なによ、その言い方」

「気を悪くされたなら、ごめんなさいね」

「気を悪くされたらならだつて、こんな事言われて気分の良い人間なんているはずじゃないか。それにしても気持ち悪い、自分が嫌なことを言うたびに気分が悪くなる。」

「大切な人が亡くなつたら、自分の生きる意味もないって思ってるんですか？それだつたらあなたには最初から意味なんて無かつたんですよ。それを知ることが出来て良かったですね」

「なら、あなたがやつてることつて意味が無いことなんです。意味がないモノに無理矢理くつついてお金をもらつてあさましい」

「それはお互い様」

夕月が涙目になつてきている。いや、泣きそうなのは俺も一緒。それが顔に出てなければいいが……。

「そんな風に思つてるなら最初から口に出せば良かったじゃない？」

「口に出せないから今までこうやって夕月さんの側にいるんじゃないんですか」

これは俺の都合じゃないか、夕月が悪い訳じゃない。

「なら、どっかに行つてよ。私の近くに來ないでよ」

「できることなら、あなたの知らない場所で暮らしていきたくいですよ。だけど、そう言うわけにはいかない。俺だつてあなたの近くに

居たくない」

「イヤよ」

「それなら、俺にどうして欲しいの？」

「死んで欲しいわ」

「そうでしょうね、夕月さんはそう言う人間ですから」

なんでこんな言葉しか出てこないんだ。夕月が嫌いな俺を追い出さないのは優しいからじゃないのか、親や兄に頼めば俺を追い出すことぐらい簡単にできるじゃないか。それに言い争ってる時もそうだ、暴力になれば夕月の方が強い。でも、夕月は誰かを傷つけることは出来ない娘。

「私は絶対に他人に媚びを売りながら恥をさらして生きていかないわ。あなたのそう言うところが大嫌いです」

「奇遇ですね。俺だって自分の意見を言うことを出来ながら何も言わない、何もしない怠惰な人間は大嫌いですよ」

「それでも理央は私の側にいるつもりなの？」

「夕月さんはそれでも私を側に置かないといけないんです」

だから、俺たちは一緒に屋敷に帰った。お互いに口も聞かない、顔も見ない。でも半径数メートル以内に相手を感じないといけない。死ぬほど苦しかった。

「ごめん」

同じ部屋で夜の勉強をした後、帰り際に小さな声で俺は言った。夕月に聞こえないほどの小さな声で。別に反省をして謝った訳じゃない、夕月を傷つけた事に対して謝ったわけでもない、ただ思っても無いことを言ってしまったことに対して謝ってるだけ、夕月に対してか自分に対してかわからないけど。

「あの日、何について謝ったの？」

夕月は4年後に俺に聞いた。だけど、俺はそんな昔のことは覚え

てないと嘘をついている、今更みっともなくて本当のことなんていえるはず無いだろ？

俺が本当のことを言えば夕月だってあのときのことを教えてもらえるのだろうか？でも、お互いに知らない方が良いことだっただけであるはずだ。特に憎しみ合っていた時の記憶なんて今の俺たちには必要ないんだから。

嫌いな日々2（後書き）

すれ違った日々を書くのって苦手です。お互いに何も話さず、なにもしないのであれば書くことがないですよね……

## 兄弟

「兄さんごめんね。僕のせいで苦勞をしてるなんて」

「気にするな、真央。べつにおまえのせいだなんて思ってもいないから」

申し訳なさそうにする俺の弟。俺はおまえのためなら少しぐらいの苦勞だって喜んでしてやろうと思ってる。

「でも、僕だったらあの人の側にいることできないよ。絶対に壊れてしまう」

「俺はもう壊れてるよ、きつと」

「ねえ、兄さんもう帰ってきてよ。兄の苦しむ姿なんて見たくないよ、兄さんはあの女に関わったら絶対にいけないよ」

知ってる、だからこそおまえに逢いたくなかった。おまえは優しいから壊れていく俺を黙ってみていることは出来ないことを知っているから。

「真央、ありがとう……………」

そしてごめん……………」

「私、真央さんにそんな風に思われていませんから……………」  
そうなんだよね、不思議なことに夕月って初対面の真央に懐いたんだよね。真央も夕月のことを気に入ったみたいだったし。

「面白かったね。最後の方で泣いちゃいました」

夕月が見たがっていた映画は悲恋モノだった。夕月は涙もろい癖にこういうのを見たがる、そして俺もこういう話は嫌いじゃなかった。

「うん、でもハッピーエンドになってもらいたかったね」

でも、せめて物語ぐらゐは幸せな話を見てみたいと俺は思つてしまふ。悲しい話なんて現実世界にたくさん転がっているんだから。「うん、ホントにそう思います」

俺たちは映画について話しながら、ぶらぶらと町を散策していた。肌寒い2月だけあつて、土曜日の午後なのに人通りはそれほど多くなかつた。みんな暖かい地下街を歩いているのだろう。

「っあ、ちよつと待つて」

シルバー細工を売っている店舗の前で足を止めた。十字架の形をしたストラップが気になつてしまったのだ。

「これ、いいね」

夕月に同意を求めてる。夕月も気に入ってくれたらしい。

「買うかな」

そう言つて俺はそれを買つた。少し痛かつた出費だったがこういうモノは欲しいときに買わないと次に店に来たときは無い可能性の高いのだ。

「お腹すいたね、何か食べていかない？」

「いいですよ。私もお腹ペコペコです」

夕月は食べ物の好き嫌いはない娘だつた。だけど、俺の方が好き嫌いが多いので店を選ぶのは苦労する、夕月は黙つて付いてきてくれるけどね。

「ケーキでも食べるかな、夕月さんはパフェがいいかな？」

俺たちはショーウィンドに飾つてある見本に釣られて綺麗な内装のカフェに入った。

「リオくんのケーキ美味しそうね」

夕月は甘いモノが好きなのは知つていた。一年近く一緒にいると相手の好物ぐらゐはわかるようになる。

「少し食べるかい？」

俺は起用にフォークでケーキを少し切つて夕月の皿にのせる。それを美味しそうに食べる夕月を見て少し嬉しくなる。きつと、俺た

ちって周りから見たら仲の良い兄妹に見えるんだろうな。

「生クリーム、少しもらって良い？」

返事を聞かずにフォークで夕月のパフェからクリームをすくった。恨めしそうに夕月が俺を見てるが気にしない。俺だって甘いモノは好きなんだから。

でも、男って損だよな？女の子がパフェを食べても絵になるけど、男がパフェを頼むのは恥ずかしいから。

不意にポケットから電子音が鳴った。この着信音はメールだ。

「メールきたよ」

一緒にいる時間が長だけあって夕月も俺の携帯電話の着信音は知っていた。俺はメールを開いて、そして返信をした。

「っあ、またメールだね」

3回ほど返信と着信を繰り返して、夕月に頼み事をすることにした。

「夕月さん、お願いがあるんだけどいいかな？」

「なあに？」

「30分ほどここで待ってもらって良い？弟がこの近くに来てみたいなんだ、ちょっと会ってくるね」

「わかった。ケーキを注文して待ってるね」

俺が仕える主は物わがりの良い子で良かったと思う。

「夕月ちゃんって言うんだ。よろしくね」

「こちらこそです」

弟と2人で会うつもりだったのに夕月も一緒に居ることになっていた。

「夕月ちゃんって僕と同じ学校だったんだね」

「はい、中等部にいるんです」

しかも、初対面なのにうち解けてるし。俺が夕月と仲良くなるのに半年近くかかっているのに。

「真央さんっておいかつなんですか？」

「夕月ちゃんより3つお兄さんだよ」

それにしては人見知りの激しい夕月にしては珍しかった。初対面の人とこんなに会話するなんて。

「お兄さんって家ではどんな人だったんですか？」

さて、どうしてこうやって3人になったのは真央とメールのやりとりが終わってすぐの話になる。

「あれ、兄貴。もしかしてデート中だったの？」

ミニスカートが似合ってる可愛い店員さん呼んで夕月のおかわりのケーキを注文して俺は立ち上がるところだった。真央との待ち合わせの場所に行くために。だけど、待ち合わせの場所に行く前に真央は俺を見つけたのだ。

「って、真央。おまえどこにいたのさ？」

「そこを通つたら兄貴たちが見えたから。で、こちらの人は？」

「水鏡夕月さん、社長のお嬢さんだ」

「そうなんだ、僕は芦屋真央。よろしくね」

まあ、ちよつとしたハプニングが合ったが真央を連れて席を立つと思つたときに夕月が言つたんだ。

「真央さんは何を頼みますか？」

真央が店に入って来たから店員がこつちに来たのは知っているが、夕月にそう言われたら注文をしないわけに行かないじゃないか。つてわけで真央が同席することになった。

「優しい兄だよ。何かあったら助けしてくれるし、この人の弟として生まれて良かったって感じかな」

そう思ってくれて嬉しいよ。俺たちはずっと仲の良い兄弟でいような。

「家でもそんな感じだったんですね」

「真央、もう俺の話はいいだろ？あまり家でのことをばらすな」

ん、真央がいると口調が元に戻ってしまってる。夕月は特になんとも思っていないらしいからいいけどね。

「でも、びっくりしたよ。ずいぶん若い彼女を連れてるカップルだなあって思ったら兄貴だったんだもん」

「そんな風に見えたんですか？」

少し頬を赤くした夕月が聞いた。真央、夕月は照れ性なんだからあまりからかうなよ。

「兄妹に見えたって言えよ」

夕月のためにフォローを入れる。夕月は可愛い部類に入ると思うし、もう少ししたら好きな男の一人ぐらい出来るだろう。

「夕月ちゃんみたいなら可愛い妹が欲しかったんだ。こんな兄貴でよければもらってくれない？」

「真央、それぐらいにしておけ。彼女困ってるだろ？」

夕月が真っ赤になって言葉に詰まっていた。それに俺だって夕月みたいな子供よりももう少し年上のお姉さんのほうが好みだし。

「私も真央さんみたいなお兄ちゃんが欲しいですよ」

「ちゃんと血のつながったお兄さんいるじゃない？聞いたら悲しむよ」

「ん、でも年が離れてるから兄ってよりも保護者みたいだもん。

一緒に遊び歩くことが出来る年の近い兄が欲しいって思うんですよ」

「そう言うモノなの？」

「そう言うモノですよ」

「なら、今度3人でどっかいこうか？」

真央が提案すると嬉しそうに夕月が同意した。弟は社交的な人間だから誰とでもすぐにうち解けるが夕月まで真央に懐いたのは意外だった。

「さて、そろそろ帰るね。夕月ちゃん、またね」

一緒にカフェを出て解散することになった。立ち去ろうとする真央を俺は引き留める。

「真央、明日おまえの誕生日だろ？」

財布を開けて先ほど買ったストラップを取り出す。

「一日早いけど誕生日プレゼント。ホントは来週家に帰ったときに渡そうと思っていただけ、今日あえたから渡すね」

「兄貴、ありがと」

そして俺たちは別れた。余談だが来週に家に帰るときに夕月におみやげを渡された、弟の誕生日のために夕月が手作りのケーキを作ったのだ。真央はそれを喜んで美味しくそうに食べた、それを夕月に伝えると嬉しそう微笑んだ。

## 兄弟（後書き）

まずは読んでくれてありがとうございます。徐々に関きを書いていきたい  
と思いますので気が向いたときに目を通してください。

嫌いな主

## 休日の過ごし方

慌てずにゆっくりと俺は上着を脱いだ。露わになった上半身を鏡に映してみる、筋肉がさほど付いてはいないが、余計な贅肉も付いてはいない。そんな自分の体に満足して下も脱いだ。

シャワー室から水が流れる音が聞こえている、きつと体を洗っているところだろう。俺は裸になってノックもせずに入った。

「はいよ、もう」

「待ちきれなくてね」

「リオくんってエッチね」

彼女は少し拗ねたような表情を見せる、それが可愛らしい。だから、俺はゆっくりと抱きしめた。服の上からだ小さな胸だと思っていたが意外とボリュームがあった。

「キスしていい？」

答えを聞かずに俺は口づけをした。甘い味がした。

「私がいなくときにそんなことしてたんですか!!」

俺だつて正常な男なんだ、休みの日に女の子を抱いたりだつてするぞ。

「理央、今夜暇だろ？合コン行かない？」

京司さんの誘いはいつも突然だった。そして、誘われるときはいつも予定が入ってない日なのだ。

「別にいいですけど、私なんて誘ってもいいんですか？きつと京司さんと同じ大学目当てでくるんじゃないですか？」

「よく言うよ。それでもいつもお持ち帰りしてるじゃないか？」

「やめてくださいよ。夕月さんに聞こえるじゃないですか」

「聞かれてまずいことでもやってるの？」

意地悪なことを言う人だ。

「わかりました。着ていく服がないので貸してくださいよ」

俺と京司さんの体格って似ていた。だから、そう言うときはいつも京司さんの服を借りていくことにしている。その方が女の子受けがいいのだ。

「すでに用意してあるよ。部屋から勝手に持って良いぞ、一時間で準備してこい」

「一時間もいりませんよ。先に行ってちょっと買い物させてもらっていいですか？」

「わかった、車だすから10分後に玄関な」

俺はいつものように京司さんの部屋から服を拝借して出かける準備をした、京司さんの話術が上手なのでそれに合わせるように話せば俺にも付いてくる女の子が多かったのだ。

「今日のメンバーは？」

「2vs2だよ。2人も可愛い子さ」

「それって合コンって言わないんじゃない？」

どうやらデートに誘った女の子が1人じゃイヤってことで友達を誘ったらしい。俺を誘ったってことは両手に花で遊ぶつもりはなく夜の町にとけ込むことが目的らしい。まあ、そう言うのは俺も嫌いじゃないんだけど。

俺はタバコに火をつけた。他の人たちの前では吸わないが京司さんと一緒に遊ぶときだけは吸っている、部屋で服を借りたときについでに京司さんのコレクションのジップを一つ拝借してきたのだ。

絶対にこういう姿を夕月には見せることは出来ないと思ってしまう。「で、何時にどこ集合なの？」

京司さんは遊びに行くときに敬語を使われることを嫌がる。特に女の子がらみだと余計にだ。まあ、確かにそんな言葉を使われると周りがひくだろう。だから俺は休日の時だけは京司さんため口で

会話をしていた。

「駅前で彼女たちを拾ってから飯を食いに行くことになってる。これ使って良いぞ」

そう言つて一枚のチケットを渡された。ちよつと豪華なホテルのチケットだ、つまりここに行けつてことらしい。俺も京司さんと同じホテルを使いたくないから素直にそれに従つてる。ホテルで会つたらお互いに気まずいしね。

「さて、あそこにいる子たちだ。理央、拾つてきて」

俺は女の子たちに声をかけ車に乗せた。

「リオくんつて19なんだ。私と一緒にだね」

「そうなんだ、ユカちゃんつて可愛いから年下だと思った」

隣に座つてる女の子と仲良くなる。夕月と同じぐらい京司さんとも長いつきあいだから何を求めているかがわかつてしまふ。それつて嬉しいことなのか悲しいことなのかはわからないが。

「リオくんつて大学生してるの？」

「違うよ、社会人だよ。まあ、安月給だけだね」

女の子との会話の中で京司さんに合図を送つた。自分のことを正直に話せば、相手のことを気に入つた合図、逆に気に入らない子の場合には大学生と嘘をつく。事前に決めてあるのだ。

気に入つた子であれば、仲良くなつて次に会うときに嘘の情報を与えていたら不信感を抱かせるし、つじつまが合わなくなつてしまふ。もう、二度と会おうと思わない相手なら嘘をついたところで二度と会わないのだ、特に問題はないからだ。

「へえ、すごいね」

「別にすごくないよ。たまたま働くのが早かつただけ」

京司さんも同じように隣の子と仲良く話してる。つまり1 vs 1を2つにしていることだ、ホントは下心丸出しでイヤなんだけどね。

まあ、実際に下心はあるんだけどね……

「ユカちゃんのそれ美味しそうだね。食べさせて」

ちょっと甘えた仕草を試してみる、この子は甘えるのが上手だけど甘えられるのも嫌いじゃないらしい。俺はこの子の心を掴むために一気にたたみかけた。

「この後、暇？」

「うん」

「なら、食べたら2人でどっかいかない？」

「ん」

「イヤだった？」

「イヤじゃないよ」

そしてこの後のデートの約束を取り付ける。京司さんも上手くやったらしい、京司さんの隣に座っている女の子は綺麗系の子だけど、個人的にはユカちゃんのほうが俺の好みだった。

「さて、そろそろ解散しない？」

みんなが食べ終わるのを確認してから京司さんが言った。俺は京司さんに目で合図をしてユカちゃんを連れて先に店を出た。

ユカちゃんと別れて携帯の時計を見る、22:16と表示されていた。今日はアルコールを飲んでいたので屋敷に戻るのは躊躇われる、俺はまだ未成年なのだから。携帯を取り出して京司さんにメールを打った。

”今日は実家の方に帰ります。昼前にはそっちに帰ります”

そして実家に電話を入れた。京司さんからの返信メールが来ないって事はまだお取り込み中か運転中にどっちかだ、今日の京司さんは酒を飲んでいなかったからもしかしたら家に帰るのかもしれない。

嫌いな主

翌日、夕月に何をしてきたの？と聞かれたがただ遊んできたとか答えなかった。こんな事していると知ったら夕月は俺をどう思うだろうか？

## 理央と真央と夕月

真央は俺の自慢の弟だった。勉強は出来るし誰にだって優しい弟は近所の人たちからも好かれている。別に俺が近所の評判が悪いわけじゃないけどね。

「兄さんいいの？」

親から大学に行かせる学費は1人分しか出せないと言われたときに俺は弟に譲ることにした。俺の成績も悪くはなかったが、名門高校に奨学生として通ってる弟と普通の公立高校の通ってる俺では同じ上位の成績でも学力のレベルは違っているはずだ。

「別に気にするな。俺だって2・3年働いたら自力で大学にでもいくさ」

「ありがとうね、兄さん」

俺たちは仲の良い兄弟で良かったと思う。そして真央が俺の弟として生まれてきてくれた運命に感謝だっと思ってほしいと思う。

「真央さんのことを大切にしているんですね。うらやましいです・・・」

そりゃ、そうさ。真央が俺にとって自慢の弟であるように、真央にだって俺のことを自慢の兄だと思って欲しいからね。

「理央も料理上手くなったな」

「そりゃ、毎朝作ってたら上手になりますよ。それに教えてくれる先生が優秀ですから」

俺はそう答えて夕月にウィンクする。夕月も少し照れながら俺の目を見ていた。5月の大型連休、社長に京司さん、夕月に俺で朝食を食べていた。

「最初、俺とおまえの皿に真っ黒な鮭がのつてたときはなにかの嫌がらせだと思っただぞ」

「最初だったんだから仕方がないじゃないですか」

「こつやつて穏やかな日常をずっと望んできた。色々トラブルは絶えないが今の生活に満足している。」

「さて、後片付けが済んだら出かけてきますね。明日帰りますね」

今日は弟と待ち合わせをしていた。久々に弟と遊んでから実家に帰る予定になっている、親の顔を見るたびに色々とお節介なことを言われるがまだ未成年の身、それは仕方がない。

「俺も出かけるから、駅までなら乗せて行ってやるぞ」

「ありがとうございます。すぐに準備してきますね」

部屋に戻ってから充電器にささっていた携帯電話をポケットに入れて玄関に向かった。今日は気持ちの良い朝だった。

「さてついたぞ。おまえら降りろ」

「え？おまえらつて夕月も？混乱してる俺をよそに夕月も俺と一緒に車から降りた。夕月も一緒に車に乗ったときはてっきり京司さんと夕月でどこかに行くモノだと思っていたのだ。」

「リオくん。早く行こ」

おめかしをして可愛くなってる夕月が俺を急かす。とりあえず、俺はどうして夕月と一緒にいるか聞くことにした。

「昨日、学校で真央さんに会ったの。そしたらこの前のケーキのプレゼントを一緒に遊ばないって誘われちゃったの」

真央は誕生日のプレゼントに夕月から手作りのケーキをもらっていた。弟は義理堅いところがあるけど、なにも俺が居るときに誘わなくなつていいじゃないか。仕事抜きでゆつくりと遊びたかつたのに。それにしても夕月が初対面の真央に懐き、遊びに行くのに嬉しそうについて行くななんて珍しいと思つた。

「リオくんの弟さんだからかな、なんか私のもう一人のお兄ちゃんつて感じがするの」

きつと俺たちに妹が居たら真央は夕月に接してるようにかわいがるだろうなと思う。真央は近所の子供たちからも慕われているから「兄貴、夕月ちゃん」

夕月とファーストフードに入ってジュースを飲んだら真央がやってきた。

「夕月ちゃん、可愛い服着てるね。似合ってるよ」

「ありがとう、真央さんに言われると嬉しいです」

ん、もしかして俺って居ない方が良かったのかな。年齢的に真央と夕月が2人なら立派なデートに見えるだろう。

「さて、これからどこ行こうか？久々に兄貴、勝負する？」

「ん、今日はやめておこう」

そして俺たちは昼の町にとけ込んでいった。

「今日は楽しかった」

夕月が満足そうに言った。俺たちはあれからいろんな所に行った、3人でボーリングをしたりダーツをして遊んだ、ゲームセンターにも行った。お腹がすいたら甘い物も食べに行ったり、映画館でポップコーンも食べた。これ以上遊び尽くせないほど遊んだと思う。

夕月は俺と真央の手を握って3人で歩くのが好きらしい、こういうところが子供みたいだった。きつと俺と真央に妹がいたらこうやって3人で出かけていたんだと思う。

「夕月ちゃん、帰りはどうするの？」

「えーとね、兄さんが迎えに来てくれることになってるの」

夕月はそう言って携帯電話で兄の京司さんに電話をした。俺はトイレに行くと言って真央と夕月を残し、こっそりと喫煙所でタバコを吸ってくる。タバコを吸っていることは真央にも内緒にしていることだから。

「もう少しで兄さんが着てくれるって」

戻ったら夕月の電話は終わっていた。それなら京司さんが来るま

でどこかで時間をつぶそうと提案する。

「なら、もう一度モグラたたきしたい」

夕月がそう言ったので希望を叶えるためにゲームセンターに行った。夕月はモグラたたきが上手だった、そりゃこう見えても運動神経も悪くないし喧嘩したら俺や真央よりも強いだろうしね。

「今度こそ100点を」

夕月の目に炎が見えるのは気のせいだろうか。結局俺たちは京司さんが来るまでゲームセンターで時間をつぶしていた。

余談になるが真央は京司さんともうち解けて仲良くなっていた。

理央と真央と夕月（後書き）

ネット小説ライティングに登録してみたのですが、思った以上に人  
が見に来てくれて嬉しいです。これからママに更新していきたい  
と思っておりますので、是非に見に来てください。ご感想、お待ちして  
おります

嫌いな主

## 海の思い出

「ほら、私はここよ」

海岸沿いの砂浜に俺たちは2人きりだった。

「まってよ」

俺は夕月を追いかける。まるで恋人を追いかけるみたいにはしやぎながら。

「お願い、私を捕まえて」

追いついた俺は夕月を抱きしめた。そして二人して海に倒れ込んだ、水は冷たかったが夕月は暖かった。

「もう、離さないよ」

「えーと・・・ホントに離さないでくれますか？」

そうだね、君がもう少し大人になって俺が君に惚れることがあればね。

「どこに行きたい？」

夕月にたずねる。今日は暇だったので夕月とデートじゃなくてお出かけをすることにした。夕月にとっては夏休みだけど、俺にとっては仕事の時間が増えることなんだよね。

「リオくんの行きたいところで良いよ」

任せられても困るんだよね。俺と夕月では年が離れてる、だから趣味とかも全然違うから俺が行きたいところは夕月にとって面白いとは限らない。

「ちよつと遠いけど海でも見に行くか？」

中学生最後の夏休みだ、楽しい思い出でも作ってやりたい。今から電車に乗って行けば午前中にうちに付くことが出来るし、夕方には帰ることが出来るだろう。田中さんがいれば連れて行ってもらう

ことが出来るかもしれないが、田中さんは社長と一緒に会社に行っているはずだった。

「いいですけど、水着とか用意できてないです」

「泳ぎたいなら来週でもプールに連れて行ってあげるよ。今日は海だけ見て帰ってこよう」

「わかった、支度してくるね」

冷蔵庫から冷たいジュースをコップに入れて夕月が来るのを待っていた。夕月の希望により夏祭りの日から俺は夕月にかしこまったしゃべり方はしていなかった。もちろん、2人きりの時だけだ。

「どうして、車で行かなかったの？」

「ゆづきがうるさいからだよ」

俺たちは電車の中にいた。こういう暑い日に車の中に閉じこもるのも居心地が悪い、もっとも電車の中も快適というわけではないがそれに俺が運転すると助手席の夕月が対向車や信号を見るたびに騒ぐので夕月とドライブをしたくなかった。

「こっやって電車でどこか遠くに行くのって初めてかも」

普段は普通に接しているけど、こういう時って俺と夕月に大きな壁があると感じてしまう。俺もたしかに電車でどこかに遠くに行くことは少なかったけど、電車に乗ること自体は少なくなかった。だけど、夕月は電車に乗ること自体が珍しいらしい。

「今日は泊まりがけて訳でもないし、そんなに長く向こうにいれるわけじゃないからあっちについてかき氷を食べて帰るつもりで行こうな」

「うん、でもせっかく海に行くならゆづくりしたかったなあ」

「それなら、今度京司さんに連れてきてもらなさい」

「そのときはリオくんも一緒に行くの？」

「いいよ。でも、俺は泳ぐには苦手だからね」

電車の中って不思議な空間だと思う。部屋で一緒に居るときよりも話が弾む、それに景色を見ている飽きないし。

「でも、水着も持ってきてないのに砂浜に行ってもきつと私たちが浮いてるわよ」

「うん、そう思う」

だから、俺は海に行くとは言ってるけどビーチに行こうとは言っ  
てはいなかった。俺たちが行くのは海水浴場のある一個前の駅なの  
だ。

「風が気持ちいい」

岩に腰をかけて夕月が言った。俺たちは岩場にいる、少し離れた  
海岸にいけば砂があるけどテトラポットに腰をかけて海を見るのも  
悪くはないだろう。少なくとも俺はこういうのも嫌いじゃない。

「うん、暑いと思っていたけど海辺は意外と涼しいね」

「リオくんってこういうところにも来るの？」

「たまにね。ゆづきはこういう場所は嫌いだった？」

「いや、嫌いじゃないよ。リオくんが一緒ならね」

夏に家族でここに来ていた。別にうちの家族がひねくれて人が少  
ない場所を好んでいるわけじゃない、親父が釣りが趣味でここでよ  
く釣りをしていただけだった。

「ここはね、よく家族で来ていたんだ。親父に連れられて俺や真央  
もここで釣りをしたかな」

「へえ、釣りをするの？」

「親父以外とは滅多にしないかな。真央は友達とたまに行くらしい  
けどね」

俺は親父や真央と違ってインドアな人間だった、お袋もどっちか  
と言えば家にいる方が好きだったらしいが、家族が出来てその考え  
が変わったらしい。俺が中学生の時は毎年のように夏にキャンプに  
行ったりもしていた。

「ゆづきは釣りとかしたことはあるの？」

「ないかな、お父さんも兄さんもしないから」

「そか、機会があつたら今度連れて行つてあげるね」

「そうね、リオくんが釣つたら私がそれを料理してあげるね」

約束がホントになれば楽しいだろうなと思う、だけどそれと同じぐらいに無理かもしれないと思つていた。でも、実際にその約束が果たさすことが出来た。ただし2年後になつたけど。

「水が気持ちいい」

海岸に出て夕月が靴を脱ぎ海に足をつけた。1駅離れた場所では海水浴に着た人たちでごつたがえしになつてゐるだろうけど、ここは俺と夕月しかない。

「リオくんもおいでよ」

重い腰を上げて俺も靴を脱ぎ海に足を入れた。夕月の言うとおり水が冷たく気持ちよかつた。さて、どうしようか？ドラマの1シーンみたく追いかけてこでもしたほうがいいのかな。

「ほら！」

夕月が水を俺にかける。ホントにドラマのシーンみたいだ。

「やめるよ」

そう言つて俺も水をかけ返す。確かにこついうのも悪くなかつた、結構楽しくなつてきた。

「つきゃ」

夕月が小動物みたいな声をあげて躓いた。自分1人で転ぶなら別にかまわないが転ぶときに俺の足を掴んでいたので俺まで下半身がびしょびしょだ。

「ぬれちゃったね」

「ああ、どうしようか？」

1駅ほど歩いて海水浴場にいけば着替えぐらい用意できるだろう。だけど、夕方までには帰れなくなつてしまつ。まあ、こついうトラブルのために携帯電話つてあるんだけどね。

「真っ暗になったね」

「ああ、景色が見えないね。疲れたなら寝てていいよ、ついたらおこしてあげるから」

結局は1駅分歩いた。京司さんに電話をしたが自分たちで帰ってこいと言われただけだった。結局、家に着いたのは10時を回った頃。社長に軽く説教を受けその日は終わった。

だけど、夕月にとっては楽しい思い出になったので俺は満足している。

## 冬の夜

雪が降ってきた、俺は手のひらを雪を受け止める。冷たい感覚を残し水となつて消えていった。

「静かだなあ」

真央や水鏡の人たちも今は居ない。それが少し寂しい気がする。

「がんばるか！」

決心をした俺は自分が宿泊するホテルに戻った。

「あなたは私の前から居なくなるつもりだったんですか……」

そこまで大げさな事じゃないさ。ただ、遠くに行きたかっただけだよ。4年ほど……

吉報を持ってきたのは真央だった。吉報とは俺の合格通知、けど誰にも教えていなかった、俺が遠くの大学を受けたことは。

「わざわざ、ここまで来ることもないだろ？」

水鏡家のリビングに社長、京司さん、夕月そして真央が座っていた。俺にとっては吉報でも他のメンバーにとっては寝耳に水だったらしい。

「だって、この大学ってどこにあるかわかってるの？」

「そりゃ、学校名を見れば誰だってわかるだろ？」

俺が受けた大学はかなり遠方にある所だった、ここから通うことはもちろん出来ない。片道3時間をかけて通学する生徒はいないだろう。

「芦屋くんは誰にも言わずに受験をしたのかい？」

兄弟の言い争いを制したのは社長だった。京司さんと夕月はただ見守っているだけ、俺の受験がこんな大事になるとは予想外だった。

「ええ、まあ」

曖昧な返事しかできない。だけど、俺がなにをしようが俺の勝手じゃないか。

「理央はこの大学にいきたいのか？」

「まあ、行きたいとは思っているんですが」

「兄貴はそんな大事なことを誰にも言つてないの？」

「なんか、俺が悪いことをしたみたいじゃないか。」

「別に騒ぎ立てることもないだろ、もちろんいつかは大学には行くつもりだしそこを受験したのは通いたいからだよ。だけど、なにも来年に行くとは言っていないだろ。わざわざここに持ってこなくてもメールや電話で言えば済む話だったじゃないか？」

「だけど・・・」

それでも食い下がろうとする弟。おまえには本心を話しても良いと思ってるが、それはここで話すべきじゃない。

「まあ、その話はこれで終わりでもいいじゃないですか？」

空気を変えるためにおどけて言ってみせ、紅茶を一気に飲み干した。

「真央、続きは今度家に帰ったときだ。駅まで送ってやるから今日は帰れ、うちの事情を俺の職場に持ち込むな」

そう言つて俺は立ち上がって、真央に上着を渡した。それでも何かを言いたそうな真央を急かして玄関に連れて行く。

「送っていくぞ」

京司さんがそう言ってくれるが真央と話すことがある。

「いえ、たまには弟と話しながら歩きます」

支度を終えた真央が丁寧に挨拶をして屋敷を後にした。

## 嫌いな主

「来年かな、もう一度受験して合格するつもりだ。今年はその練習」

「なら、再来年に兄貴はあの大学に行くの？」

「ああ、さすがに来年行つても生活ができないしな。親に負担はか

「けたくないし」

学費を払って、生活費などを考えるとバイトだけはまだきつかった。免許をとったり遊びに行ったりしていたのは災いしたのだろう。無理をすればやれないことはなかったが、4年間バイト付けの生活をするよりはもう一年働いてから余裕のある生活をしていきたい。

「その話は夕月ちゃんにはしたの？」

「いや、してない。彼女は関係ないさ。来年、高校にあがったらきつと俺の役目は終わりだよ」

「でも、夕月ちゃん。寂しがると思うよ」

「大丈夫だ、きつと新しい友達も出来て楽しくやっていくさ」

「いや、そんなことじゃなくてさ」

真央が何を言いたいのかはわかっていた。夕月は俺に懐いている、もちろんいろんな意味でだ。だけど、それは夕月の環境が特殊だからだと思っている。きつと、これから友達ができたら同年代の男子にも興味を持つだろう、それに俺はロリコンじゃないし。

「それに、今年のうちにあそこに合格出来たんだ。来年はもっと勉強したらもう少し上の大学に通えるかもしれないじゃん。おまえだつて勉強しないと俺に抜かれるぞ」

「別に僕は兄貴と競ってるつもりないし」

そうだよな、おまえと俺は競い合ったり争ったりしないんだよね。兄弟って身近なライバルって言うけど俺たちはライバルにもなれないほど仲が良すぎている。

「来週帰ったら親父たちに話すから合格通知は黙ってるよ。それにホントのことを言うと誰も知らない場所で自分自身の力で生きてみたいんだよ。それが無謀だとしてもさ」

「それなら今だつて自分の力で生きてるじゃん？」

「そうだけだよ、でも今までのことを忘れてみたくなることだつてあるだろ？結局は家族に支えられて、そして水鏡家で良くしてもらつて生きてきてるんだ」

「そんなこと言ったら、誰だつて一人で生きてるわけじゃないよ」

「まあ、もう決めたんだ。来年は無理でもその次で行ってみせるさ。真央、応援してくれよ」

「わかった、兄貴が決めたなら何も言わないよ。だけど、夕月ちゃんに寂しい思いはさせないであげてね」

「ずいぶん、夕月が気になるんだな？惚れたのか？」

「莫迦、妹が悲しむ姿を見たくない兄心だよ」

その言葉を夕月が聞いたら喜ぶと思うぜ、夕月だっておまえのことを兄のように慕って居るんだから。

「さて、気をつけて帰れよ」

改札で弟を見送るとコンビニでタバコとマッチを買った。今は徐々にタバコを吸いたい気分だった。

マッチで吸うタバコは特別だと思う。何も知らない人はライターでつけてもマッチでつけても一緒だろうと言っけどマッチを擦ったときのリンの焦げた臭いを俺は好きだった。

「知ってる？未成年ってタバコ吸っちゃダメなんだよ」

「中学生も喫煙所に来ちゃダメだって知ってた？」

タバコを吸っていると夕月が俺の隣に来ていた。

「リオくんは遠くに行っちゃうの？」

「さっきの話か？言っただろ、来年大学に行くつもりはないって」

「でも、その次の年で行っちゃうんでしょ？」

「そんなのわからないさ。来年、合格するとは限らないだろ」

もう一本火をつける。夕月に一本勧めるが彼女はいらないうって答えた。まあ、吸うって言われても困るけどね。

「リオくんが居なくなると私はひとりぼっちになっちゃうよ」

「大丈夫だ。ゆづきに友達が出来なかつたらそのときは俺がずっと一緒にいてやるから」

「友達が出来てもどこかに行かないでよ」

「俺を困らせるなよ。休みとかには帰ってくるんだし、別に消えていなくなるわけじゃないんだから」

「それでもイヤ」

「わがままを言うなって」

こんなところで言い争いを続けるのもイヤだったので、夕月をつけて外に出た。物語ならここでなんだかの言い争いや和解などがあるかもしれない、だけど俺たちの現実は中途半端なまま終わることになる。お互いにそれ以上は何も言わずに家に帰った、社長や京司さんも何か言いたいことがあったんだろうが特に何も言ったりはしなかった。

結局は人生や進路を決めるのは自分自身。だけど、社長や京司さんは俺に選択肢を用意してくれた。それはまた別の話。

## 冬の夜

「俺とおまえは似てるのかもしれないな？」

眠ってる夕月に話しかける。こいつに言いたいことがあるが、それと同じぐらい聞かれたくないことだつてあるんだから。

「同じ事を考えていたなんてな。それも同じ所を選んだなんて」

寝顔の夕月は何も答えなかった。俺はそつと布団を掛けてやる、今日はお互い言い争って疲れたから。

「俺とずつと一緒にいるか？」

答えを聞かずに俺は自分の部屋に戻った。俺自身、なにを望んでいるかはわからなかった。

「はい、ずつと一緒にいます」

夕月は答えていた。だけど、俺はその答えを聞いていなかった。

水鏡家の家族会議に俺は参加していた。議題は夕月と俺の進路についてだ、夕月は水鏡家の者だから家族が心配するのは当然だとしても俺については関係ないはずなんだがね。

「理央とユヅは似てるな」

京司さんが関心したように言う。別に關心されることでもないだろうけど。

「芦屋くん、覚えているかい？君と夕月が友達になれると言ったのを？それはね、君たちが似ているからだよ。ホントに考えることもやることも一緒だったとは」

俺が1人で遠くの大学を受験していたように夕月も高校を受験していたのだ。今の学校にいれば受験をせずに高等部に進学できる、それも一流の私立高校。

だけど、違ったのは夕月が受験した高校は一つじゃなかったこと

だった。複数の地域の学校を受験して全部、合格している。その中には俺と同じ場所にある高校もあった。

「ユヅはどうしたいんだ？」

「わたしは合格した高校に行きたい。今の学校にいても友達だって作れないし、誰も知らない場所で生きてみたいの」

誰も知らない場所でやってみたいか。俺と同じ事を言ってるやがる、だけど俺はそのために働いたしその中には自分の力で生活をするって意味も含まれて居るんだよ？

「それでも無理だと思う。夕月さんにはせつかく家族がいるんだし、それに頼ったって恥ずかしいことじゃないよ。いつかは大人になるんだから、自立するのはそれからだって遅くないですよ」

諭すように俺は言った。なら、自分はどうかのさ？

「それならリオくんはなんで遠くにいくの？」

「私は大人だから自立するのに遅くないとおもって……」

言葉に詰まる。夕月の理由と俺の理由って一緒なんだからさ、夕月を否定することは俺を否定することになる。

「リオくんに出来て私には無理なの？」

「俺だって無理だから、まだ大学には行かないし」

口調が元に戻ってる、こういうときは無理して戻したらおかしくなるか。

「わたし、ここにいっても変われない。だから、誰も知らない場所に行きたいの。もちろん、生活とかお金とかは出してもらわないといけないけど」

「ゆづき、違うよ。環境が変われば自分が変わるって言ってるけど、君が折り合っていないのは自分自身だよ。たとえ、誰も知らない場所に行ったとしても、新しい友達が出来たとしても自分自身が変わったとしても君自身が自分と折り合っていないと何も変わらないんだよ」

認めたくないけど言わないといけなかった。夕月は自分自身と折り合っていないことをそして環境が変わったところで自分が変わら

ないと何も変わらないことを。だけど、それは俺だって同じだった。それを夕月は気づいていた。

「それならリオくんだって同じでしょ？大学に行って勉強したりいっぱい遊んだって今のリオくんと変わらないよ」

「ああ、そうかもしれないけど。きっかけが欲しかったんだよ」

「それならわたしだってきっかけがあれば変わるかもしれないじゃない」

家族会議から俺と夕月の言い争いになってきた。2人は特に口を挟むことなく俺たちを見守っていた。

「理央、おまえあと三年ユツの世話をするつもりはないか？」

俺たちの言い争いが一段落ついたところで京司さんが提案した。

「ないです」

俺は即答した。

「まあ、まて。おまえは大学に行きたいんだろ？それなら大学に行けば良い、ユツも行きたい高校に行けばいい。だけど、ユツが1人で生活出来るとは思わない、だから理央にユツの世話を頼みたい。

もちろん、生活費はこっちで用意してやる」

「それに芦屋くん、夕月は子供じゃないから自分のことだって自分で出来る。君が四六時中世話を焼かなくて大丈夫だよ。だけど、私たちはそれでも心配だから君に側にいてもらいたいんだよ」

夕月と一緒に暮らすか。夕月と一緒になら女の子を部屋に連れ込むことが出来ないが、生活費が出るし夕月と一緒になら楽しいかもしれない。だけど、それでいいのか？

「ユツはどうだ？」

夕月も考えているようだった。夕月が俺と同じ地域の学校に行きたいって言ったのは俺がそこに行くつもりだったからだろう。ホントはここから通える学校に行こうと思っていたに違いない。

「でも、娘さんを他の男と一緒に暮らさせるのって不安じゃないんですか？私が夕月さんに何かするとは思わないんですか？」

「大丈夫だろ？おまえガキは好きじゃないって言ってるし、それに力づくでユヅに何かしようとしてもユヅのほうがおまえより強いじゃないか」

そうなんだよね、夕月のほうが俺より強いんだよね。別に俺が弱いつてわけじゃない、夕月は護身術をやってるから鍛えられるだけ。華奢な外見から想像できないけどね。

「考えさせてもらっていいですか？」

「少し考えたいです」

あれから色々考えた。夕月だって色々考えていたに違いない、だけど俺は答えを決めた。でも夕月に確認しておこうと思う。俺だけの問題じゃないから。だから、3日たった午後に夕月を散歩に誘った。

「なあ、ゆづき。一緒に暮らさないか？」

どうやって言い出そうか考えたけど、2人になると簡単に口から出た言葉だった。まるで休みの日にどこかに遊びに行こうって言う感覚で。

「それってプロポーズ？」

「莫迦、ちがう」

ませたお子様だ。最近は大入っぽくなってきたがまだまだ子供だと思っ。

「それなら、わたしを貰ってくれるなら一緒に暮らしても良いよ」

「そか、なら話はなかったことにするか」

夕月の頭を軽くこづいて近くににあったベンチに腰をかけた。

「冗談です。でも、いいですよ」

「ああ、俺がゆづきを襲いそうになっても返り討ちにしてもらえるしな」

「そんなことするんですか？」

「しないよ、冗談だ」

俺は夕月と暮らしている。色々問題は絶えないが楽しい日々が続いていることは間違いない。おまえとこうやって一緒になるのにすごい苦労したな、すれ違いもあったし、喧嘩や言い争いだってした。だけど、おまえと一緒にいれて良かったと思ってるよ。これはホントにね。

## 冬の夜（後書き）

これで最終回になります。この続きは考えてあるので後日マップしていきたいと思います。ここまで呼んでくれた方ありがとうございます、そして続きになる話も読んでくれたら幸いです

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5583e/>

---

嫌いな主

2009年4月13日23時22分発行